



教育研究の現場は、最終到達点のない問題に、
学生とともに悪戦苦闘するところかも知れない。

大学生活を ふりかえって

工学部教授
板垣 厚一



本学工学部に奉職したのは、昭和40年1月
で、学生時代を加えると、人生の大部分を
本学に、お世話になったことになる。

当時の教育、研究環境は、かなり貧弱であ
った。建物(長岡市にあった)は木造で、
暖房は石炭かガスストーブで、冷房はな
かった。教育機材は、黒板とチョークが主
で、配布資料は、ガリ版刷りで、専門書
なども少なく、教員の講義は、貴重な知
的情報源であった。研究室では、不平等
電界中の金属隔壁効果の問題に取り組
んでおり、絶縁破壊時の電圧波形を記
録する必要があった。このため、高速
度ブラウン管装置にカメラを取り付け、
35mmのX線用フィルムに撮影し、現
像、焼き付けを行い、ようやく絶縁破
壊電圧瞬時値を測定することができた。

現在では、教室、研究室の環境は、飛躍
的によくなっている。教育機材も、OHP、
ビデオプロジェクター等があり、教育メ
ディア、教科書も豊富にあり、eラン
ニングにも適した環境になっている。高
速度のインパルス電圧波形も、簡単に
プリントアウトしたり、フロッピーディ
スクにセーブでき、データ処理の時間短
縮化が進んだ。

このような状況変化にも関わらず、気
中の不平等電界の絶縁破壊問題は、研
究手法は高度化しているが、依然とし
て解決されていない。また、教育の
方法論にしても、教育環境が充実して
きているが、納得できる方法が確立
せず、試行が繰り返し行われ

ている。教育研究の現場は、最終到達
点のない問題に、学生とともに悪戦苦
闘するところかも知れない。状況変化
が早い折、このような問題解決には、
在学生、OBの若い人に期待するところ
が大きい。

時間的制約の少ない恵まれた教育研
究の場で、長い期間を過ごさせていただ
いたことを心から感謝いたします。こ
れも、在学生、OB、教職員のご支援
のおかげと思っております。最後に、
本学の益々の発展と皆様のご健勝を
祈念いたします。

退官にあたって

工学部福祉人間工学科教授
大鍋 寿一



私は、新潟大学に約6年前に参
りましたが、はや退官とは、月並み
かもしれませんが、昨日来たよう
で、実際「早いな!」というのが
実感です。

日本の国際競争力ランキングはこの
10年で49カ国中1位から30位へ
転落、新しい発明や技術に関心を
示す人の割合は14カ国中14位、
その一方で高齢化率は世界一の
状態で「超高齢社会」を迎えよう
としています。

そのような中で全国の国立大学
はこの4月から独立行政法人とな
り中期目標・中期計画を文部科学
省へ提出し、認可を受けていま
す。各大学はその目標をどこに
置いているのだろうか、独法化
を待たずして大学を去る者にと
して、文部科学省は日本の目標
をどこに置いて認可をしよう
としているのか、各大学が5年
後その

退官

平成
15
年度



「眞のゆたかさ」という新しい価値観の創出に
チャレンジして行きたいと思っています。

目標を達成したあかつきには、「超高齢社会」の日本は世界の中でどこにいるであろうか、気がかりです。

小生は新潟大学退官後米国University of Pittsburghで福祉人間工学の教育研究を続けますが、福祉人間工学の教育研究を通して福祉工学・生活支援工学・人間支援科学のあるべき姿は勿論、私自身もその一員となる日本の超高齢社会システムのあるべき姿までを自分自身にも照らし合わせながら考えて行きたいと思っています。「眞のゆたかさ」という新しい価値観の創出にチャレンジして行きたいと思っています。

5年9ヶ月の間、皆様のご協力により、新潟大学での教員生活を終え、新しく外国での教員生活へチャレンジする「気合」を与えて下さったことに感謝いたします。

退官にあたって

工学部助教授
加賀 利広



1966年（昭和41年）、当時長岡市にあった工学部共通講座（工業数学講座）に数学担当教員として採用されて38年間新潟大学にお世話になりました。

赴任当時、工学部には専門関係の書籍雑誌等の研究資料はほとんどなく理学部数学教室のセミナーに参加させていただき重い雑誌を手にして毎週2日長岡から西大畑と五十嵐（浜）に電車で通いました。統合の話は着任の時間聞いていましたが、統合移転問題、大学紛争、統合白紙撤回等を経て新潟の地で一緒にセミナー等ができるようになるまで15年が経っていました。その後工学部の改組で共通講座は廃止され情報工学科数理情報講座へと教育研究環境が変りました。

工業数学講座当時、院生向けにボルチャンスキーの「最適制御理論」など制御理論を中心に学生と一緒に数学と工学との関わりを学び、数理情報講座では代数幾何符号に関する教育研究に従事し、学生時代最も応用からかけ離れていると思って選んだ代数幾何学（特に正標数の世界）までもがデジタルの世界に必要なになってきたことに驚き嬉しく思っています。ものを創り使うための理（コトワリ）としての数学の必要性を実感しております。

最近、「理数離れ」、「人材劣化」などと言われていますが、理なくしては何も生まれないのではないのでしょうか。新しい大学は理の教育を大切にしたいと思えます。最後に、講義やセミナーなどでお付き合いした方々やお世話になった皆様に感謝いたします。



ものを創り使うための理（コトワリ）としての
数学の必要性を実感しております。

